正徹と了俊

――師事過程と歌書相伝めぐって――

稲田利徳

はじめに

正徹と了俊――二人の関係は、形式的に言えば師弟の間柄である。了俊にとって正徹は、単なる弟子の一人にすぎなかったかもしれないが、正徹にとって了俊は、払拭することのできない大きな影であった。感受性の強い青年期に遭遇した偉大な師の試練が、その人間の生涯に微妙な影響を与えることがあるが、正徹にとって師了俊は、まさにそういった存在であったといえよう。

了俊の著作はかなりの数にのぼるが、弟子正徹に関して、直接、積極的に発言したものはみえないため、二人の関連をさぐるには、もっぱら「正徹物語」「草根集」など、正徹側の資料に依拠せざるをえない。特に「正徹物語」は、彼の晩年の回想(注1)、しかも、他人の打聞になったものと考えられるため、叙述に対して、慎重に処理しなければならない。ここでは、その方法として、「正徹物語」の諸本を比較検討したり、了俊の著作に目を通し、できるだけそれと、関連する記事をみいだして確認することにする。

正徹と了俊の関係には、歌風の問題、古典講釈などの分析方向も考えられるが、本考では、「正徹物語」の了俊関係記事を中心に、二人の師事過程を跡付け、さらに、歌書相伝の様相をたどり、伝記上の諸問題にも言及してゆきたい。

一、師事過程

正徹が了俊に最初に出会った場面は、「正徹物語」に、およそ五十餘年前とは思われぬほど、克明かつ印象的に回想されている。かかる鮮明な思い出を綴ることができたのは、正徹が常々、その場面を反芻していた証拠であり、忘れることのできない出会いであったことを物語る。

(1) 応永頃、東洞院に住居をかまえていた正徹は、恩徳院の律僧にともなわれ「冷泉の為尹、冷泉の為邦、前探題了俊、其外近習の人卅人餘」なみいる、冷泉派の歌人の八月二十五日の月次歌会に出座した。その時、了俊は「八十餘の入道」で、正徹自身は十四才であった。（「正徹物語」古典文学大系本による。以下同じ。但し、諸本の異同は随時触れる。）(注2)

この回想には明らかな矛盾がある。即ち、了俊八十餘才といえば、

応永十二年（一四〇五）以降、正徹十四才（多・神A・寛・島—十四、五才）といえば、応永元年（一三九四）（他の諸本によると、応永元～三年）で、そこに約十年の錯誤が認められるのである。

このため、この歴史的な二人の出会いの時期には諸説あり、児山敬一氏は、応永元年、または二年（注3）、伊地知鉄男氏は、応永三、四年頃とされ（注4）、さらに、井上宗雄氏は、了俊の行動と「高野春秋編年輯録」など参照し、応永三年の可能性も提示された（注5）。

一方、この時期の確認に最も合理的な解釈をほどこされたのは川添昭二氏で、了俊の詳細な伝記考究により、彼が突然、九州探題を解任され、京都に召還されたのは、応永二年閏七月、その後「路次の難儀なことを思うて、了俊は上京を畏怖している（『土居寛氏蒐集文書』）。いったんは上京を拒否しようとしたが、博多居住をとどめられ、肥前（佐賀県）千葉氏の媒介と少弐貞頼・菊池武朝の奔走で、一族・従者とともに肥前小城に落ち集まり、八月中旬に出津し、同月下旬に着京している（『薩藩旧記』前編巻二十二）。」（『今川了俊』二一一頁）と、その足跡をつきとめられ、先の正徹との出会いを「了俊の九州肥前の出発を十六日直後とすると、船で帰っているようであるから、二十五日頃に帰京していたとみても、あながち無理ではない。応永二年のこととしておこう。」（『今川了俊』二二〇頁）とされた。

川添氏の調査で、了俊は、応永二年八月十六日までは九州にいたことが確認され、さらに帰京して、応永二年十一月十四日には、駿河遠江に下向しているから、八月二十五日をこの間に求めるとすれば、応永二年しかないことになる。（但し島本には、毎月十五日とあり、この本文によれば、この可能性はない。）この推定は、あるいは正鵠を得ているかもしれない。また、それを否定する根拠もないのであるが、あまりに合理的解釈にすぎるような気もしないではない。

これまでの諸説は、正徹の先の回想を、すべて、同一時期の同一場面と理解し、そこに生じている十年の錯誤の原因を、「了俊八十餘」の方を正徹の記憶誤りとし、「正徹十四、五才」（回想としては、十四才より、この方が穏当であろう）の方に起点をおいている。が、回想の内容は、もっと複雑かもしれない。

まず「正徹物語」のこの段の、発話意図をみると、二つのことが考えられる。一つは、若くして和歌を詠みはじめたということ、他の一つは、最初から、冷泉派の隆々たる歌人の知遇を受けたということで、いずれも、自讃的な方向でなされている。前者は、治部入道の口を通し「児の哥あそばさるゝ事は今の時分更に無き事なり。禅温が若盛りの時などにてこそ、さやうの事は承りしか。やさしき御事也」と称讃させているので、「了俊八十餘」にあわせて、正徹二十四、五才ではしっくりしない。さらに「正徹物語」によると、この時期以降、奈良の門跡へ奉行して歌を詠まなかったが、「其後、親にをくれ侍りしから、又さし出でて哥を詠み侍りし也」とあり、正徹の父の死は、彼二十才の時なので（注6）、この点からも不都合である。先の冷泉派の歌人の出座する月次会への参加は、正徹十四、五才とみる方がよい。しかし、その会に了俊が参加していたかどうかは、なお検討を要する。応永二年頃の了俊の行動からみて、京洛での正徹との出会いが相当に難しいこと、それに了俊「八十餘の入道」という最初の印象もあながち無視しえないものがあり、後述のように、二人の行動を示す資料が、応永十年前後に集中するからである。先のような回想をしたのは、自讃的な発話意図から、為尹、為邦らとともに、あえて了俊を加えたのか、あるいは、

数年後、了俊も同じ月次会に出座することがあり、それが二重写しになって錯覚したのかもしれない。以上のように、正徹と了俊との最初の出会いは、まだ、検討の余地が存するように思う。

(2) 慶運が子に慶孝とて有りし。東山黒谷に侍りし。花の盛りに冷泉為尹いまだ宰相にて有りし比、父の為邦・了俊など同道して東山の花見侍りしに「題を懐に入れて、道すがら案じて鶯尾の花の下にて講ずべし」と有りしに、「さらば慶孝をさそふべし」とて、庵室へ尋ね行きしかば、折節内に侍りしをいざなひつゝ、尋花とて題を一首出し侍りしかば、慶孝、

さそはれて木のもと毎に尋ねきぬ思ひの外に花や恨みん

と侍りし。（「正徹物語」二一〇～二一一頁）

この話に対し、児山敬一氏は、正徹も同道したものか、了俊などからの仄聞か、これだけの文章では、両方に解釈できる（註7）と、断定をひかえられたが、聞書的な感じがなく、実見的なので、正徹も同道していたとみてよいのではなかろうか。この年時は、「冷泉為尹、いまだ宰相にて有りし比」よりかなり限定できる。この文は、諸本に異同もなく、かなりはっきりした記憶のようであった。「公卿補任」によると、為尹の参議（宰相）在任中は、応永八年三月二十四日から応永九年三月二十八日の間なので、この出来事も、その期間に限定できる。井上氏は「新旧暦日を対照させると、八年は閏一月があって、二月一日が新三月廿四日となり、桜は二月十日頃が盛りであったと思われ、為尹は参議任官以前である。九年は三月一日が新四月十二日で恐らく二月上旬が花盛りと思われ、この東山花見は九年であった」（前掲著・四四頁）と巧妙な考証をされているが、おそらく妥当な見解ではないかと思う。因に、川添氏も、了俊略年譜で、応永九年に位置させている（註8）。

なお、この話の発話意図は、為尹、了俊らとの、東山黒谷での花見を懐しく語ることにもあったろうが、それとともに、慶孝の「さそはれて」の歌の奇抜な発想を提示することにあったのであろう。「正徹物語」では、この記事に続けて、素月という禅僧の「花や恨みん」の歌を「つゐでに思ひ出し」ている。

(3) 応永の初の頃了俊とともなひて石山にまうて侍しに御堂の正面のはしらに了俊かきつけられし歌、

はるかなる南の海の補陀らくの石の山にも跡はたれけり

予その筆をとりてかきつけし

跡たるゝこゝさへ同し波の上に南の海も遠からぬかな

その後廿四年をへたてゝ粟津にかりそめに住しころ同寺に詣てむかし俊公のかゝれし歌を見しにあともなくきえてところ〳〵ありしを哀に覚えて（歌二首略）（「草根集」巻三・丹鶴本）

これも、了俊と石山参詣をしたときの回想であるが、「応永の初」とは、具体的に何年のことであろう。従来、「その後廿四年」（他の諸本では廿餘年とあり、この方が良い）と、了俊の応永期の行動を関連付け、(1)応永四年説（藤原隆景氏）（註9）。(2)応永二～五年説（荒木尚氏）（註10）、(3)応永六年以後（松原三夫氏）（註11）、(4)応永八・九年頃（井上宗雄氏）（註12）など、多くの諸説があった。

しかし、すでに拙稿（註13）でも考証したように、新資料「永享九年正徹詠草」（大東急記念文庫蔵）のなかに、「（六月）廿六日石山にまうつ、舟にてなれはことにみ所おほく侍しかとも、みちすから

は連哥百韻にて上下せしかは、哥なともよますそ侍し、御堂へまいりしに、三十あまりのいにしへ故伊与入道了俊とゝもなひてまいりたりしに、御堂の西の柱に、はるかなる南の海の補陀羅君石の山にもあとはたれけりとかゝれしに……」と、再度の石山参詣の記事がある。これによると、再度の参詣は、永享九年六月二十六日となり、通説より、約十年後のことであった。その原因は、「草根集」の「廿餘年」は「三十あまり」の誤写にある。従って「応永の初」は、永享九年から三十餘年前、応永十年前後となる。

なお、正広の家集「松下集」（国立国会図書館蔵）によると、再度の石山参詣に際し「昔老僧（正徹のこと—私注）古仏地院長算誘引ありて」とあり、仏地院長算を同道していたことも判明する。

(4) 或所の褻貶の會に、為尹卿、契絶恋に、

かけてうき磯松がねのあだ浪は我身に帰る袖の浦風

と詠みしを、一座ことゞゝく負のよし申し侍りしを、我一人いひはりて、殊勝のよし申しき。（中略）了俊音もせずして聞きゐて、あり〳〵て落涙して、「げにさにて侍り」と申されし時、一座皆一同に閉口して勝にさだめられき。扨後に作者をあらはしたれば、為尹卿の哥也。此事をよろこびて會席毎に申されしとかや。（「正徹物語」一七一頁）

この褻貶会は、児山氏の指摘にもあるように為尹の死没年である、応永二十四年正月二十五日以前（正徹37才）に開催されたものであろう。しかも、この会には、為尹、了俊などの冷泉歌人が出座しているが、(1)でみた、正徹十四、五才の頃のものではなかろう。このように、自己の意見を堂々と披瀝し、一歩も譲らない態度は、とても十代とは考えがたく、二十代、三十代の出来事ではないかと推定されるからである。

この回想の発話意図は、この文の後に続く正徹自身の言によると「ほぞにとをりてさかひにいたらざる人は、人の哥を見る事もかたき也」と、他人の歌を真に理解するには、鑑賞するもの自身が、高い境地に達していることの必要を主張することにあったようだが、了俊をして感嘆せしめた自讃意識が背後にあることは言うまでもない。

なお「此事……申されしとかや」の主体を児山氏は為尹にとられているが、ここは、先の正徹の発話意図や、立派な弟子をもった了俊の感涙からみて、了俊とみるのが良い。

(5) 為秀の、

哀れしる友こそかたき世なりけれひとり雨きく秋の夜すがら

の哥をきゝて、了俊は、為秀の弟子になられたる也。（「正徹物語」一八〇〜一八一頁）

この歌は、「正徹物語」では「『秋の夜すがら』といひ捨てゝはてざる所が肝要也」と、余情味豊かな歌として例示している。了俊の「落書露顕」にも「秋雨」の題で、

情ある友こそ難き世なりけりひとり雨きく秋のよすがら

此の歌いかゞ侍りしにや、心にしみて侍りしかば、門弟に成り侍りしなり（歌学大系本）

とあるので、おそらく、了俊の口から直接聞いた話であったと思われる。両者を比較すると、歌の初句が相違する。（「正徹物語」の方、諸本異文なし」（注14）正徹が「情ある」でなく、「哀れしる」

と記憶していたところには、彼の感受の一端が察せられるような気もする。

(6) 「正徹物語」（一九四～一九五頁）には、了俊の実見談として、和歌に達者な頓阿の逸話が二つ語られている。その一つは、ある歌会で、誰れも詠まなかった歌題を、為秀が頓阿に投げ与えられたところ「その題は、梅散りて客来ると云ふ題にて候也。人の読まぬも道理也。さていかなる哥をか読みつらんと思ひて、披講の時聞き侍りしに、

とはるゝもいとゞ思ひの外なれば立枝の梅は散り過ぎにけり」

と見事に題意を詠みえた話。その二は、別の歌会で、頓阿が座を離れた間に、ライバルの慶運が、歌題を全部すりかえておいたが、再び座に帰った頓阿は、いささかもあわてず、詠み果せたという逸話である。

「正徹物語」の諸本（多・神・寛・島）には、第一話のないものがあるが、この話が脱落か増補かは検討を要する。しかし、第一話は同じく了俊の「落書露顕」に、

五条の和歌所にて、為秀卿歌侍りしに、梅散客来と云ふ題を人々よみて侍りしを、頓阿追加に

とはるゝもいとゞ思ひの外なれや立枝の梅は散り過ぎにけり

とあるので、了俊から直接聞いた話であったと思う。

ところで、この逸話で少し問題なのは、正徹の頓阿に対する態度である。頓阿の「草庵集」に対して、正徹は好感をもっていないが（東野州聞書）、この達者な速吟ぶりには、いささかも批判めいた言辞をもらしていない。これは一つに、正徹自身、速吟の達人であったことにもよるであろう。但し、他のところでは、頓阿など四天王が、為世の風体を受けたため「此比ほひよりも哥損じける也」（二二七頁）とし、また、或る七夕の歌会で、頓阿が七夕鳥には必ず鵲をよむべきだと主張した逸話をのせ、「か様に二条家には少しも異風なる事を嫌ふ也」と難じている（二〇五頁）。因に、後者のことは、了俊の「言塵集」（古典全集本）に「頓阿・法師云、七夕の鳥と云題にてはかさゝぎの外不可詠と申き。比興の事也」とあるので、先の話も、特にことわってはいないが、了俊から直接聞かされたものかもしれない。

(7) 了俊は、若年のころ、秀句をいださんとして、句数を少なくしたところ、良基より、初心の時はそれではいけない「いかにもおほくロがろにしもて行けば、自然に上手にも成るなり」と折檻あったとし、正徹も、この点から、了俊に時折、注意されたという。（「正徹物語」一八四～一八五頁）

この良基の教訓は、了俊の「落書露顕」に「連歌句数の事。二条殿の御教には句のよしあしをわけず、心を広々ともちて句数をせよとの御教」と記しているので、正徹が了俊から聞いたことは確かであろう。ただ、「落書露顕」の「連歌句数の事」は、句数を多くせよとの教導ではなく、むしろそれを戒める方向にある。先の引用に続き、「（良基の御教は）初心の時の御教にて侍りしを、逐年いまは、初心も功入りたるかと存ずるともがらの中にも、句数を高名する人も侍るめり。これを案ずるに、銭づくの連歌を好む人のくせになりたる歟。（中略）凡句数を高名とする人は、未だ名聞にのぞみて、真実の数寄のあはれは、更になきかと見及び侍るなり」と手厳

しい批判をあびせている。これは、連歌だけではなく、「了俊一子伝」（歌学大系本）の「歌も連歌も数を多不レ可レ読事」の条に「初心の時は、歌のよきも句のよきも真実はわきまへがたき間、たゞ多よみあつめしあつめば、若よき事に云あてもやせんと思間、いくらもするが極たるへき案也」とか「句数をすれば、しらぬ人は上手とや思ふべきなどゝ心をやりてする也。いたらぬ人の所行也」とあるように、一貫した主張であった。

今、これを先の正徹の言説と比較すると、矛盾するかのごとき感じを受ける。正徹は無類の速吟者であったので、了俊の教導を、このようなかたちで語ることで、自己の歌数の多い創作態度を弁護せんとした発話意図のあることは、一応、考慮しておかねばならない。が、仔細に吟味すると、必ずしも矛盾するわけではない。了俊が歌数・句数の多きを戒めるのは、数多いそのこと自体ではなく、「句数を高名」したり、それを上手と意識する、詠者の心的態度にある。正徹の意図するのは、初心から「よき哥を詠まんとする」創作態度に対する戒めの方に重点があったと思う。

この他、「正徹物語」には、

(8) 了俊の申されしは哥詠むともあつまりて委しく哥をばよまずして哥をさたあるが、第一の稽古也。（一七六頁）

と、和歌を互に批評することが、上達の道であるととくものや、

(9) 了俊の書き給へる鍵帋にも「ますらを」はははしの「を」をかき侍る云々（一八〇頁）

と、ヲ・オの仮名づかいを問題とするもの、

(10) 萬時とて萬葉の時代を定家の勘へられたる物あり。重寶也。為秀の自筆本を了俊のくれられしを、人のほしがられし程に出し侍りき。そつ〳〵としたる物也。（一八五頁）

と歌書相伝を示す記事などが散見される。

以上、正徹側の言説を中心に、了俊との師事過程・教訓受継の方向などに検討を加えてきた。そこに濃厚に察せられるものは、了俊を表面に立てることによる、正徹の自讃談、あるいは、了俊の教導を、正徹個人の特質を是認せしめる方向において採用していることであった。この発話意図の方途は「正徹物語」が、弟子を前にして語られたものであると考えれば、当然のことかもしれないが、また、見方をかえれば、正徹にとって、了俊が重大な師であったこと、当代にあっても、了俊が人々から重んぜられていたことを示している。

二、歌書相伝

「正徹物語」によると、正徹は、先引(10)のように、了俊から、為秀自筆の「萬時」（「万葉時代考」）。正徹は定家とするが、実は俊成の著）を与えられている。これは、了俊から正徹への歌書相伝の一端を示すものとして注目すべき記事である。

名古屋の蓬左文庫には「為家卿和歌之書」（注15）という袋綴写本一冊が所蔵されているが、その末尾には、了俊の長文の奥書の転写があり、彼の伝受していた「詠歌一躰為秀卿同奥書」以下十四本の歌書目録が存し「子孫之中数奇志之輩可伝取」などと記している。先の、正徹が受けた、為秀自筆本「萬時」も、かかる了俊所持の一本であり、これ以外にも、了俊から正徹への歌書の相伝があったと思われる。

ここでは、主として、京都大学附属図書館平松家旧蔵の「西行上人談抄」に検討を加えたい。この本に関しては、すでに田中裕氏なども紹介されているが（注16）、本論考では別の角度から処理したい。該書は近世書写の袋綴写本一冊で、表紙に「西行上人談抄」、目次に「西公談抄、詠哥大概、十躰、和哥秘々、草子書様、文字仕」とある通り、すべて六種の歌書の合綴である。そして、巻末に次の識語がある。

(A) 右六ケ之説了俊相伝之処数奇之御志深重奉之間無是非うつさせ申し候相構々雖御子孫無数奇人々ニ不可有御伝候当時此道有名無実候へとも両神御加護之上者松葉ちりうせぬ事に哉

応永十二年十二月　日　　満八十徳翁。俊判、

(B) 尊明殿

わかのうらの江によるのミか老鶴の命もひなのあらねとそ思ふ

此一帖正清相伝早

(C) 西に行むかしの人のえしみちを道にならふるすゑの世の春

正広

六種の歌書のうち「和哥秘々」は「近代秀歌」の別本であり、「草子書様」と「文字仕」は田中氏の調査によると、両者合わせて、いわゆる「下官集」に該当するという（注17）。

ともかく、先の識語によって、応永十二年に、了俊は、以上六種の歌書類を、尊明なる人物に相伝していることがわかる。この京大本と同系統の本に、高松宮家蔵「西行上人談抄」がある（注18）。この高松宮本も、先の六種の歌書を合綴する点、および奥附など、ほぼ京大本と同じであるが、先引の識語部分に若干の異同や、また、別の奥附がある。即ち、(A)の部分では「尊明殿」の下に、やや小さく「請嶽童名」と注記がある。ついで(B)の部分は同じだが、その次に、

応永三十一年二月六日　　俊徹

金春殿進覧　　物者判

とあり、(C)の部分の後に、

此一帖清嶽和尚自筆也従鎌倉殿金春禅竹之然三男九郎持下候所望也書写者也

文明十五年九月　日　　忠広在判

徳三郎丸ニ譲渡也

とある。

この高松宮本の識語には、親本の漢字の読みのできていないものが多い。例えば(A)の部分では「教失ぬ」（散が良い）「早徳翁」（八十）「請嶽」（清）などのミスがあり、「俊徹」なども、了俊の「俊」と、正徹の「徹」とを混合した感じをうける。「物者」「禅竹之然」「徳三郎」の各傍点の読みも、読み誤っているかもしれない。

以上、京大本、高松宮本を総括すると、六種の合綴本「西行上人談抄」は、応永十二年十二月に、了俊から尊明に相伝され、ついで正清、途中、応永三十一年に金春殿に進覧したこともあったが、正広に相伝され、その後、文明十五年、忠広は、清嶽自筆本をもって「金春禅竹之然三男九郎」に書写し与えたということになろうか。この際、尊明は正清と同一人物か否かにより、了俊―尊明―正清―正広と、了俊―正清（尊明）―正広との二つの相伝経路が想定される。川添昭二氏が、了俊年譜で「小田正清（尊明）にあて『西公談抄』以下を書写」とされているのは、正清と尊明とを同一人物とみられたためであろう。福田秀一氏も、最初は、前者の相伝経路を

想定されていたが(註19)、その後、後者にかたむかれたようである(註20)。しかし、田中氏は、

この「尊明」は言塵集第一の奥書に見える「尊命丸」と同じであらう。刊本其他には「尊命丸」の傍に「小田正清事」とあるが、とすればこの平松家本の奥書の第二に「正清相伝」とある人物は即ち尊明のことになる。静嘉堂文庫蔵言塵集には「小田正清事」の上に「小田正徹也」とあり、頭伝明名録巻八にも「正清、正徹元名」とある。平松家本の奥書第三に「正広」とあるのは多分正徹弟子の正広であらう。正徹は一四・五の頃了俊と一座してゐた(徹書記物語)が、応永一二年は二五歳になってゐるので童名の「丸」もいかがであらう。正徹の幼名は信清といはれてゐるが、とにかく尊明(命)・正清即ち正徹といふのは疑問としたい。(『中世文学論研究』補注一三二)

とされた。

私は、尊明(命)・正清・正徹は、すべて同一人物とみてよいのではないかと思っているが、その前に、正清について調査したい。正清は田中氏も触れられたごとく「頭伝明名録」に「正清、正徹元名」とあり、これを受けたのか「読史備要」も同様に記しており、一応、正徹の元名の可能性がある。正清の署名のあるものは、この他、岩波文庫本藤原定家歌集の巻末に附載された、木田本奥書に

応永十七年秋七月朔日書之　隱士正清

員外雑書者(中略)於称名寺草庵書之　正清
徹後之

とみえ、正清が正徹の元名なることは、いよいよ濃厚となる。この可能性を決定的にしたのは、久松潜一氏蔵「秘々抄」の筆者の鑑定によってであった。

先にも触れたように、平松家旧蔵本、高松宮家蔵本の「西行上人談抄」所収「秘々抄」は、「近代秀歌」の現存諸形態のうち、流布本や定家自筆本とも異なるものである。これと同系統のものには、吉沢義則氏旧蔵本(註21)、谷山茂氏蔵本(註22)などがあり、久松氏蔵本もこの系統に属する。この本に関しては、すでに、久松氏自身、数度にわたって報告され(註23)、また、松田武夫氏(註24)、福田秀一氏(註25)などの紹介もあり、よく知られた貴重な伝本である。最近、久松氏の御好意で、この本を実見することができたが、縦二七・五糎、横二二糎の仮綴の写本一冊で、墨付二二丁の室町中期の書写で、流麗な筆蹟である。その奥付には、

(A)、此一帖相伝申者也、了俊判

(B)、此一帖松月軒徳翁之愚身相伝如此也、正清

とあり、その次に、本文と別筆で、

(C)、此一帖不慮感得者也、文亀元酉春(花押)

とあり、さらにその裏に、本文と同筆で、

(D)、長禄元年十一月廿六日、重而書之

とあるが、この時の書写と思われる。

奥書による限り、此一帖は、了俊から正清に相伝され、さらに正清は、長禄元年に重ねて書写したことになろう。そして、ここで注目すべきことは、この本の書写は、まさに正徹その人だということである。私は、この写本を見たとき、正徹筆なることを直感したのであるが、さらに正徹筆として信用できる、静嘉堂文庫蔵「徒然草」の複製、春日大社蔵和歌懐紙(永島福太郎氏著『百人の書蹟』

所収）とつぶさに比較した結果、まさに同筆と判定された。このことは、同席された、久松、福田両氏も等しく認められたようであり、すでに久松氏は、「読売新聞」（注26）で、福田氏も「和歌史研究会会報」（三七号）に触れておられる。この事実の確認によって、正清が正徹と同一人物なることが判明しただけでなく、「近代秀歌」（秘々抄本系）の成立と伝来にも重要な問題をなげかける。

因に「長禄元年十一月廿六日」は、正徹七十七才であるが、「草根集」でその年月日をみると、二十三日は「恩徳院の歌合」、二十四日「右京大夫家にて読歌」、二十五日は、自分の庵で詠歌し、その次は、十二月四日まで記事がない。従って、二十六日は、歌会に出座せず草庵で、この久松氏本を書写する時間的余裕があった可能性が大きい。（注27）

以上によって、正清が正徹の若年頃の名とわかったが、考えてみれば、正徹、清巌などの道号や字も、正清との関連で生れたものかもしれない。京大本「西行上人談抄」が、最後、正徹の弟子正広に相伝されているのも、このことを前提とすれば、当然の経路であったわけである。

さて、次には、「尊明」であるが、現段階では、了俊の周辺に、これに該当する人物をみいだしていない。しかし、「尊明」と同一人物と思われるものに、田中氏の指摘にもあったように「言塵集」巻一の末尾の

此言塵集、讃岐之入道法世平所望之間遣畢。其後尊命丸依所望重注遣畢（日本古典全集本）

の「尊命丸」がある。「明」と「命」の相違はあるが、同一人物とみてよいだろう。「尊明」に関しては、高松宮家蔵本「西行上人談抄」に「請巌（マヽ）童名」とあり、「清巌童名」の誤写とみて、正徹の童名と注記していることになる。さらに、先の「言塵集」の「尊命丸」の傍に、諸本のうち、竜門文庫本、松平文庫本、東山御文庫本、内閣文庫二本、広島大学B本には、なんの注記もないが、承応刊本、書陵部本、広島大学A本には「小田正清事」とあり、静嘉堂文庫本では、さらにその上に「小田正徹也」と注記がある（注28）。してみると、「尊命丸」は「正清」即ち、正徹の童名ということになる。この可能性は、田中氏も、一応、想定されているのであるが、正徹の幼名が「信清」と言われているとか、応永十二年は正徹二十五才にあたれるので「童名」の「丸」もいかがであろうかと疑問視されたのであった。しかし、正清と正徹が同一人物であることが確認でき現段階では、高松宮本や「言塵集」の注記も、何か根拠あってのものとして、その可能性が大きくなる。ただ支障となりそうな点は、田中氏の御説のように、二十五才で童名をもって呼んでいることである。確かに、当時の記録類で若干調査してみたが、「丸」の童名は、せいぜい十代の後半くらいまでが多く、二十才を越えての使用は普通でないようである。が、これも、了俊が正徹にまみえた頃、まだ「尊明（命）丸」といっていたとすれば、その後も、宛名にその呼称を書いたと考えれば一応、支障とはならない。高松宮本にあの注記を記したのは、相伝の過程で、案外、弟子正広だったかもしれないし、「言塵集」の傍注も、「正徹」とせず「正清」と注してあるのは、正徹がまだ正清といっていた頃に、ある一本の「言塵集」に記された可能性もでてくる。この推定が正しいなら、「小田」という姓も、これまで、備中小田氏出身といわれてきただけに信用度をます。応永十年前後は、先の師事過程でも考証したよう

に正徹が了俊に本格的に師事関係を結びはじめた時期にあたる。了俊の著書や歌書類の相伝を所望するのも納得できる。他に、了俊の周辺に、「尊明（命）丸」と呼ばれる別人がいれば話は別だが、現段階では、「尊明（命）丸」を「正清」、即ち「正徹」と同一人物とみておきたい。

従って、正徹は、応永十二年十二月に「西行上人談抄」など六種の歌書、応永十三年五月以降まもなく「言塵集」の相伝を受けたことになる。

さらに付言すると、正徹の号である「松月」も、了俊の号を受け継いだのではないかと思われる（このことは、これまで指摘されていない）。先引の久松氏本にあった「松月軒徳翁」がそれを示す。また「源氏六帖抄」（書陵部蔵）の奥書「応永十五年五月日、梢月徳翁在印判」も『図書寮典籍解題』（文学編）『源氏物語事典』など「梢月」とするが、原本でみると「梢」「松」「招」ともよめる曖昧な字柄である。はたして、その後調査した、国立国会図書館蔵「師説自見集」（「源氏六帖抄」を含むもの）には、「松月徳翁」と明記してあった。正徹の号「松月」は、了俊の号を受継したのではないかと推定するゆえんである。

大阪府立図書館蔵「古今秘伝之条々壱巻」（袋綴・写本一冊）はその奥附に

右之条々假千金萬玉成共不可有伝受者也

正徹判者

とあるものだが、その内の「古今和歌集三箇ノ口伝血脈図」で、俊成・定家以来の血脈の後、

……為秀―┬―為邦―為尹
　　└―前上総介伊与前司―了俊―正徹

と記している。この本は、どこまで信用してよいかどうかは問題だが、正徹の手をへているこの写本において、自分を了俊の直下に位置させている点に、正徹の了俊に対する姿勢の一端が察せられるように思う。

その他、了俊から「源氏物語」の講釈を、十余年も受けており（「なぐさめ草」）、これは、正徹の歌風形成に大きな影響を与えている。

このように、了俊への信頼・尊敬は、絶対的なものであったが、一方では、常に「我は為秀卿了俊の末葉に侍れとも、哥はたゝ定家、慈鎮のむねの内を、直に尋うらやみ侍り、くたりはてたる家の二条冷泉をは、したひ侍らす」（苔莚）と語って、歌の向上を志向していたのである。

おわりに

「正徹と了俊」と題して、その師事過程と歌書伝受をめぐって考察を進めてきたが、若干ではあるが、新しい事実を追加できた。例えば、二人の最初の出会いの問題分析、石山参詣の年時考証、頓阿の逸話など、了俊著作中における関連記事の指摘、また、歌書相伝では、久松氏本「秘々抄」の筆蹟判定で、「正清」が、正徹の元名なることを確かめ、それをもとに、「尊明」が正徹の童名ではないかと推測した。これより、了俊が「西行上人談抄」など六部の歌書、および「言塵集」を、正徹に書写し、与えていた事実が明らかにな

った。

最後に、これまでたどってきた、正徹と了俊の関係を正徹の立場で表示しておきたい。

年月日	徹令正年	俊令了年	関連記事	出典資料
応永二年頃（？）	15	70	幕府奉行治部方での月次和歌会に出座し、了俊にまみえる	正徹物語
応永九年春	22	77	為邦・為尹・了俊らと東山へ花見に行く。	正徹物語
応永十年前後			了俊と石山寺に参詣し、詠歌する。	早根集・永享九年正徹詠草
応永十二年十二月	25	80	了俊から「西行上人談抄」など、六部の歌書の相伝を受ける。	京大本・高松宮本「西行上人談抄」
応永十三年頃	26	81	了俊より「言塵集」を書写し与えらる	言塵集
不明			了俊から、初心のころは、口かろく詠ずることをさとされる。	正徹物語 落書露顕
			了俊から、為秀の弟子になった機縁をきく。	正徹物語 落書露顕
			了俊から、歌を沙汰するのが第一の稽古であると教えられる。	正徹物語
			了俊から、頓阿の歌の達者ぶりをきく。	正徹物語 落書露顕
			了俊から、為秀の「万時」を与えられる。	正徹物語 落書露顕
応永二十四以前			或所の茶販会で、為尹の歌の勝を主張、了俊の賛同をうる	正徹物語
			「故伊予守入道了俊在世の時」に「源氏物語」の講釈を受けたことを回想する。	なぐさめ草

※「出典資料」には、参考資料も並記した。なお、続類従本「正徹百首」の判詞は了俊とあるが、これは、今川範政の誤りである（注29）。

注

1、細谷直樹氏は「正徹物語成立年代考」（国語国文・昭和二六・七）で、文安五年六十八歳の成立とされた。

2、諸本としては「徹書記物語」として、多和文庫本（多）・神宮文庫本（神A）・寛文二年版本（寛）・島根大学本（島）、「清巌茶話」として、内閣文庫本（内）・神宮文庫本（神B）を校合に使用する。

3、『正徹論』（八頁）では、応永二年、『今川了俊』（三三四頁）では、応永元年説。

4、『今川了俊歌学書と研究』（一〇九頁）。

5、『中世歌壇史の研究室町前期』（四一頁）。

6、丹鶴本「草根集」（巻三）によると、亡父の三十年忌を行っているが、これは、他の諸本のように、三十三がよく、正徹二十才のときに死んでいることになる。

7、『今川了俊』（三二〇頁）。

8、人物叢書『今川了俊』（二九一頁）。

9、「正徹年譜」（国語と国文学・昭和六・七）

10、「今川了俊覚書」（法文論叢文科編第八号）。

11、「招月庵正徹伝攷抄」（水甕・昭和十・六～十三・十二）。

12、前掲著書（四四頁）

13、拙稿「正徹の伝記をめぐる二三の問題」（国文学攷第三十四号）。

14、古典文学大系の頭註には「なさけある」とする本もあるとのことだが、具体的にどの伝本であろう。
15、徳川美術館所蔵了俊自筆「和哥秘抄」は、蓬左文庫本の原本であるらしい（川添氏『今川了俊』一八二頁）。
16、17、『中世文学論研究』（二六一頁以下）
18、福田秀一氏から、写真版を拝見させてもらった。
19、「近代秀歌の諸本について」（武蔵大学人文学会雑誌・第一号）。
20、「近代秀歌第四類本（秘々抄本）の伝本補説」（和歌史研究会会報第三十七号）。
21、佐々木信綱氏『国文学の文献学的研究』（一五七頁）に紹介。
22、谷山茂氏『為家書札とその妖艶幽玄体』（文林・第一号）に紹介。
23、「近代秀歌の原形について」（国語と国文学・昭和二四・一〇）・「定家歌論書考(一)」（日本学士院紀要・昭和三五・三）など。
24、「近代秀歌の疑問」（文学・昭和四二・九）。
25、前掲論文。
26、昭和四十五年四月十七日夕刊。
27、「近代秀歌」の成立や伝来に関しては、最近、福田秀一氏に詳細な論考がある（武蔵大学人文学会雑誌第二・三・四合併号など）。
28、「言塵集」諸本のうち、竜門・松平・書陵部・東山の各伝本に関しては、荒木尚氏から御教示いただいた。
29、拙稿「正徹百首の諸本と成立について」（文学・語学46号）参照。

（昭和四十五年六月）

――広島大学文学部助手――